

子どもの遊戯「子をとろ子とろ」について

竹本 凌 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 菅井京子

キーワード：鶏遊び, 子をとろ子とろ, 比々丘女, 鬼ごっこ

序論

本研究の目的は、子どもの遊戯「子をとろ子とろ」が現代まで伝承されているのか、伝承されているならば、どの程度、どのように伝承されているのかを明らかにすることである。用いる主な資料は、『日本子どもの遊び図鑑』、『江戸の子ども遊び事典』、『図説スポーツ史』、『最新スポーツ大事典』、『わらべ唄歳時記』、『日本全国児童遊戯法』、『保育のための遊び』、『遊びの歴史の民俗学』などである。現代については、文献による他、スポーツ系 A 大学の学生にアンケート調査を行う。

本論

「本遊戯」が日本で初めて行われたのは、弥生時代である。弥生時代の人々は稲作をしていた。そして彼らは「鶏」を飼っていた。彼らにとって「鶏」は宝であった。本遊戯の遊び方は、鷹が宝である「鶏」を襲う様子が描かれていた。弥生時代の「本遊戯」に関係深い稲作は、朝鮮半島から日本に伝わってきた。「本遊戯」は、稲作とともに朝鮮半島から日本に伝わってきた。弥生時代の生活が色濃く影響している遊びであった。「本遊戯」の名前は、「鶏遊び」、「補鶏遊び」などであった。遊び方は、宝である指標家畜と言われる「鶏」がモチーフで、取られ役が「子鶏」で、取り役が「子鶏を襲う鷹」、子鶏を守る「親鶏」の3役で行われていた。一人が鬼役である鷹。一人が子鶏たちを守る親となり、残りは子鶏となって親鶏の後ろに前の子の帯を握って一列に連なって遊ばれていた。

平安時代前期は、「こまどり」、「親はとるもの」、「子をとろ子とろ」、という3つの遊びが行われていた。3役は共通して「鬼」、「親」、「子」、である。平安時代中期になると、恵心によって「子をとろ子とろ」に仏教が取り入れられた「比々丘女」が生まれた。3役は「罪人」、「罪人を取り返そうとする地獄の鬼」、「罪人を守るお地藏さん」、この3役で遊ばれた。平安時代は仏教の考え方が遊びに影響しているこ

とがわかった。

江戸時代にも、「子をとろ子とろ」、「比々丘女」は盛んに遊ばれていた。この時代は民衆に対して寺請制度が制定されていた。すべての人々は、仏教徒となった。仏教が子どもの遊戯に大きく影響したことが考えられる。

明治時代になると仏教を廃して釈尊の教えを打ち捨てた。「子をとろ子とろ」は遊びではなく、体育の教材として行われるようになり、現代になると名前を知る人まで少なくなっている。仏教心が薄れていったことが大きく原因していると考えられる。「鬼ごっこ協会」のインタビュー調査では「子をとろ子とろ」は絶滅に近いと述べられた。しかし、A 大学で行ったアンケート調査の結果、おもしろい鬼ごっこの教材として名前は知らないが「本遊戯」を知っている学生が 24%いた。少数ではあるが指導者を目指す学生に教材として学ばれていることがわかった。普通の「おにごっこ」は2役で行う。しかし、「子をとろ子とろ」は普通の「おにごっこ」と違って、3役で行う。「鬼」、「子」、「親」、で行う3役が教材としての魅力である。

結論

「子をとろ子とろ」は、名前の呼び方など時代ごとに変わっているが、時代の文化を背負い、名前が変えられ遊ばれてきた。すなわち、弥生時代は稲作と関連しながら遊ばれている。平安時代から江戸時代は仏教、明治時代から現代までは教材の鬼ごっことして伝承されてきたのである。

引用・参考文献

- ・寒川 恒夫 (1991 年), 図説スポーツ史, 朝倉書店, 95 頁
- ・寒川 恒夫 (2003 年), 遊びの歴史民俗学, 名和出版, 1 頁-21 頁